

不可思議で逆説的な存在

阿 部 包（藤女子大学 QOL 研究所長）

QOL 研究所長は、藤女子大学人間生活学部長の兼任職である。だから、QOL に造詣の深い研究者が所長を務めるとは限らない。わたしの専門は、新約聖書学、しかもそのなかのパウロ研究という一般人には馴染みの薄い分野である。イエスをとおして QOL というものを考えてみたい。

よく知られるとおり、イエスの周囲には常に極貧の人々、病人の群れ、社会から排除されて生きざるを得ない人々の集団があった。社会は彼らを排除しつつ無関心を決め込んでいた。マイナスのレッテルを貼られた彼らにとって、同じ人間としてイエスが交わってくれるという単純な事実こそまさに癒しだったと言ってよい。生きる希望が彼らに生まれた。「幸いだ、貧しい者は！」とイエスは言ったが、彼らにとって「幸い」とは「神がわたしたちと一緒におられること」（インマヌエル）に他ならなかった。彼らはそれを、歩みを共に



[Metadata, citation and similar papers at CORE](#)

ここで、わたしは神（エル）の問題を持ち出すつもりはない。むしろ、われわれにとって重要なことは「インマヌ」（わたしたちと一緒に）の方である。人間の生に特徴的なことは、「共にあること」、「同伴性」とでも言うべき事態なのだから。人はだれでも一人で生まれ、一人で死んで行く。しかし、幸いにして、生の過程は常に同伴関係を他者と共有するものである。QOL は、生における同伴関係の豊かさにかかっているのかもしれない。

人間はやはり不可思議な存在である。自己実現も決して単純ではない。他者との関係なしに自己の実現もあり得ない。人間も関係性に支えられた生物である限り、他者の人生の充実抜きにわたしの人生の充実もあり得ない。他者の笑顔を見てわたしも喜ぶ。たった一人で笑っても面白くないからである。人間とはそういう生き物である。

最近、わたしは、QOL は風景とも無縁ではないと思うようになった。雪解け後の郊外の道路は、両側の空き地が夥しいゴミで溢れている。これは、その道路を走る車を運転する者の心象風景に他ならない。大型郊外店が軒を連ねる殺風景そのものの町並みも、われわれの心象風景である。これらは、基本的に利己的な価値観の結果である。他者との、社会との、あるいは世界との関係性を忘れて求められるとき、QOL も極めて未熟なものに留まるに違いない。